

「新聞を活用して『確かな学力』と『豊かな心』を培う教科指導のあり方」

指定校 2 年次 諏訪市立諏訪南中学校

中村 知浩 佐々木 章太 丸山 勇樹

I 研究の概要

昨年度から継続しておこなってきたN I E 研究であるが、昨年度の社会科授業に引き続き、今年度（前期）は国語科と数学科（後期）で研究授業をおこなった。国語科では新聞の投書を教材化し、投書を読んで意見文の「良さ」を考える活動を通し、良い意見文の中身や根拠に迫った。また、数学科の授業では、新聞に掲載されているグラフや数値を活用するのではなく、文字や図形に焦点をあて、移動によって作り出される図形が新聞の中に潜んでいること、日常の中にも数学の内容が活用されていることに気づかせた。本レポートは、7月におこなった国語科の授業実践を中心に、数学科の授業実践、社会科の授業実践などを加えて実践報告としてまとめたものである。



業間にロビーで新聞を読む生徒たち

II 国語科研究授業の実践から

1 授業の日時・単元名等

日 時 平成29年7月6日（木）

単元名 「言葉を見つめる」 作品名 「『批評』の言葉をためる」

授業者 中村 知浩 教諭

2 単元設定の理由

授業学級の生徒たちは、普段から真面目に授業に取り組んでいる。考える力に長け、課題や疑問に対して熱心に追究する姿が見られる。しかし、中には調べたことや考えていたことを文章に表すことを苦手と感じている生徒もいる。俳句の授業では、表現豊かな俳句ができあがっていた一方で、俳句に込められた思いを俳文に書かせたところ、上手く文章に起こして表現できる生徒が少なかった。

このような書くことに苦手意識を感じている生徒たちに、様々な文章を読むことや仲間と意見交換をすることを通して、文章の良さや読み手に意図が伝わる意見文の工夫などを見つけ出し、自分の文章に応用できる力を身につけてほしいと願う。

本単元「『批評』の言葉をためる」（竹田青嗣 著）は、「批評すること」の重要性を理解させる上で効果的な題材であると考えられる。不平不満だけの感情的な「批判」から、自分なりの価値判断を明確にして物事を評価する「批評」へと表現の幅を広げることが、自己の感受性の育成、周りとの調和へと繋がることを理解できるためである。また、「批判」と「批評」の違いを知ることによって、生徒たちにも関わりの大きい意見文や小論文といった文章の形態の違いやそれぞれの文章をどのようにして書いたら良いのかという問題提起にもつなげていくことができる。

そこで本題材を用いて「批判」と「批評」の違いや「批評」の重要性を理解させ、単元の終末に「良い意見文とは何だろう」という学習課題のもと、工夫して意見文を書くという学習活動を設け

る。意見文を書くにあたり、本単元では新聞の「投書」を用いる。幅広い階層の人々がさまざまな題について自己の意見を投書しており、ひとつの題に対してさまざまなとらえ方や意見があること、同じ意見であっても表現の仕方が異なることに気づきやすい題材であると考え。さまざまな表現や意見に触れることで「関心のある事柄について批評する文章を書くこと」という活動につながっていき、本単元の活動にはNIEが効果的だと考える。生徒たちは、これまでも斜面の書き写しや、新聞を使った読解問題を解くといった、新聞記事を読み、考える機会を持ってきている。本年度からは、斜面の書き写しに加え、読んだ斜面に関して意見文を書くという活動も行っている。授業と家庭学習の両方で新聞を扱うことで継続して取り組ませ、指導することができる。

「批評」を理解し、意見文の工夫点を「ひと・もの・こと」と関わりながら考えることを通して「書く力」を身につけていく生徒の姿を目指して、本単元を設定した。

3 本時案

(1) 本時の主眼

「批判」と「批評」の違いを学んだ生徒たちが、良いと思う意見文とは何かを考える場面で、新聞の投書を読み比べたり、グループで発表しあったりする活動を通して、意見文の「良さ」を捉えることができる。

(2) 本時の展開

| 段階 | 学習活動 | 予想される生徒の反応 | ○支援 ※評価 | 時 | 備考 |
|-------------------------------------|---|---|--|----|----|
| 宿題 | コラム書き写し+意見文 (朝日新聞 投書 「読書はしないとイケないの?」) | | | | |
| 導入 | 1 宿題の発表 | <ul style="list-style-type: none"> ・言いたい事が伝わった。 ・理由が書いてあって良かった。 | <ul style="list-style-type: none"> ○「自分の主張」がある文章を書いた生徒数名に発表を促す。 ○「聞いてみてどうだった？」 ○「なぜ良いのだろう？」 「色々あるとおもうけど…」 | 5 | |
| 学習問題「良いと思う意見文とはどんな文だろう？」 | | | | | |
| 展開 | 2 良いと思う意見文とは何か、予想を立てる | <ul style="list-style-type: none"> ・言いたい事がはっきりしている。 ・ちゃんと理由が書いてある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○「そもそも『意見文』とは何？」→自分の意見を書いた文 ○「『良い意見文』ってどんな文だと思う？」 | 5 | |
| 学習課題「新聞の投書を読み比べて、良いところを探そう！」 | | | | | |
| 開 | 3 学習プリントに取り組む ① 3つの意見文から1つ選ぶ ② 理由を他の2つと比較して書く ③ 根拠となる部分に線を引く | <ul style="list-style-type: none"> ・自分と同じ考えだ！ ・言いたい事が伝わってくる。 ・主張に根拠があつていいなあ。 | <ul style="list-style-type: none"> ○見本となる意見文を配布する。(朝日新聞「声」より) ○「良いなと思う意見文の一つを選び、そう思う理由を書こう。」 「理由の根拠となる部分に線を引こう。」 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ※文章中の、根拠となる部分に線を引けているか。 </div> | 10 | |

| | | | | | |
|---|-----------------------------|--|---|----|--|
| 4 | グループで意見交流をして、良いと思う意見文を1つに絞る | <ul style="list-style-type: none"> 私はAさんの文がいいな。意見に納得できるから。 Bさんの文は、相手のことを尊重していて良いと思う。 | <ul style="list-style-type: none"> ○4人グループを作る。 ○意見を持ち寄り、良いと思う意見文をひとつに絞る。話し合いの内容は1枚のプリントにまとめる。 | 10 | <ul style="list-style-type: none"> 意見が1つにまとまらないときはそれでよしとする。 |
| 5 | グループの意見を発表する | <ul style="list-style-type: none"> 例えをあげているAさんが良いという意見です。 書き手に寄り添う書き方のBさんが良いという意見です。 | <ul style="list-style-type: none"> ○班の意見をまとめたものをスクリーンに映しだし発表する。 ○出てきた意見を板書していく。 | 10 | 書画カメラによる投影。 |
| 6 | 改めて個人の考えをまとめる | | <ul style="list-style-type: none"> ○「良い意見文とは、どのようなものか。」 | 5 | |
| 7 | 意見発表 | <ul style="list-style-type: none"> 文章の書き方が良いもの 印象に残る書き方をしているもの | <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>※「構成」の良さ、「表現」の良さ、という2点に着目している。</p> </div> | 5 | |
| 8 | 振り返り | <p>↓↓↓</p> <p>「構成」の工夫があるのが良い！</p> <p>「表現」の工夫があるのが良い！</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○「最初の予想や、自分が書いてきた意見文を振り返ってどうだったかな？」 ○「次回、このことを意識して、実際に意見文を書いてみよう！」 | | |

4 授業記録

(1) 生徒の様子 ～グループ活動より～

グループごとに「『良い意見文』をひとつ決め出す」という活動の中で、次のような会話が見られた。

N生：僕はAさんの意見文が良いと思う。だって、読書はあまり必要ではないと思うから。

I生：私はCさんのが良いと思うな。Aさん、Bさんの意見文とは違って、他の考えにも目を向けているよ。相手を肯定しながら書いているのが良いなあ。

N生：（I生が書いてあることを自分のプリントに書き写す。）たしかに、やっぱり僕もIさんが言っているのが良いと思う。

「意見に共感できる」という点でAさんの意見文を選んだN生が、残り二つの意見文と比較し、思考判断した上で、「構成」や「表現」の良さからCさんの意見文を選んだI生の追究の深さに打たれた場面であった。また、グループの意見をまとめたプリントを見てみると、お互いの考えを持ち寄って、「意見文のどの部分が良いのか」「なぜ良いと感じるのか」というところを丁寧にまとめられていた。

(2) 学習プリントより ～授業のまとめコメントより～

授業の最後に、生徒たちに「『良い意見文』とはどのような意見文か」ということを自分なりにまとめさせたところ、次のようなまとめが出てきた。

- ・自分の意見を、構成や表現に気をつかいつながりわかりやすく伝わるようにまとめた文が良い意見文だと思う。
- ・具体例や答えを使う構成の工夫や、良さを共感できるように書く表現の工夫などを使うと、読む人に伝わる。そういう工夫があるのが良い意見文だと思う。

5 考察

(1) 本時の生徒の様子から

今回のグループ活動を振り返ると、そもそも「良い」と感じる点は人それぞれであるため、「良い意見文はこれだ!」とひとつに絞ることは困難であっただろう。しかし、最初は自分の判断基準で選んでいた生徒が、仲間の意見を聞き入れることで視野が広がり、判断基準に用いる材料を増やしていったことは確かだ。具体的には、最初は「自分と同じ考えだから」という判断基準しか持たなかった生徒が、「文章構成が良いから」「相手を否定しない表現が良いから」といった観点で判断している仲間を見て、自分の判断を改めようとする姿が見られたことだ。

(2) その後の様子から

多くの生徒が「相手に伝わる」「読み手がわかりやすい」「相手（反対意見）を尊重する」といった相手の立場に立つことに着目していた。そこで、生徒から出た意見を「最初に主張がある」「具体例を挙げている」「相手を肯定してから自分の意見を述べる」などといった『構成の工夫』と、「相手を完全に否定していない」「文章に共感できる」「読んでいて嫌な気分にならない」などといった『表現の工夫』の2つに分類した。そうすることで、生徒は「相手の立場に立って書いてある文」というものが、『構成の工夫』と『表現の工夫』によるものだと理解できたのではないだろうか。また、こうして得られた力を、自分自身の意見文にも活用するようになっていった。

(3) 新聞活用（NIE）の成果・課題

最後に、本時は導入の場面で新聞の投書を用いた。ひとつの題に対してさまざまなとらえ方や意見があること、同じ意見であっても表現の仕方が異なることに気づきやすい題材であると考えたためだ。投書を読む際には、「良いなと思う意見文を一つ選び、そう思う理由を書こう。」「理由の根拠となる部分に線を引こう。」と指示を出した。「ただなんとなく」ではなく、投書の中に色ペンを使って線を引き、自分自身の意見を支える根拠を明確にできたことは、生徒にとってもその後の学習を深めていく上で効果的であった。

また、前時まで「批判」と「批評」の違いを学んできた生徒たちが、良いと思う意見文とは何かを考える過程で、新聞の投書を読み比べたり、グループで発表しあったりする活動を通して、意見文の「良さ」を多面的に捉えることができたと考える。これは、幅広い階層の人々がさまざまな題について自己の意見を投書し、ひとつの題に対して多様なとらえ方や意見があること、同じ意見であっても表現の仕方が異なることなどを身近に学べる新聞という絶好の資料を教材化（精選）し、活用できたことが大きい。本校国語科の研究テーマにもある「仲間と関わり合いながら、読みを深め、自分の考えを表現できる国語学習」についても、大きなヒントを得られたのではないかと考える。

今後の課題としては、このような研究の取り組みを継続的に進め、さらに他教科にも広げていくことではないかと考える。



新聞の投書を読んで、気になるところにラインを引く



仲間と意見を交わし合い、学びを深める

Ⅲ その他の授業の実践から

1 数学科の研究授業より

(1) 授業の日時・単元名等

日 時 平成29年12月19日(火)

単元名 「平面図形」(1年生)

授業者 佐々木章太 教諭



新聞の中から移動によってできた図形を探す

(2) 研究授業の流れ

後期の研究授業としておこなわれた数学科の実践では、1年生の「平面図形」の単元で新聞活用に挑戦した。単元の中で移動(平行移動、対称移動、回転移動)の概念を学んだ生徒たちが、新聞の中から移動によって作り出されている文字や図形はないかを探し出した。その上で、新聞から見出した移動によって作られた文字や図形についてグループで説明をし合い、自分の考えに級友の考えを取り入れながら、移動の種類とその特徴を明らかにしてレポートにまとめた。全体で共有すると、平行移動だけで作られた図形があったり、回転移動でもあり、対称移動でもある図形があったりと、同じ図形でも異なる移動によってできている図形であると、図形の捉え方を広げることができた生徒もいた。

(3) 新聞活用(NIE)の成果・課題

<成果>

- ・新聞が持つ情報は、記事が持つ内容だけでなく、数学的にとらえることができるきっかけになるようなものもあるということを示した。
- ・単元の流れを崩したり、入れ替えたりせずに、無理なく新聞を用いることができる一例を示すことができた。あくまでも教材研究の一環として新聞を活用できる可能性を示すことができた。
- ・「切って貼れる」という新聞の特性を活かした授業を展開することができた。

<課題>

- ・取り出してきた図形や文字の背景にある情報にまでは生徒の関心が及ばなかった。数学的な視点から新聞をみる、今回の場合で言えば、「移動によって作られた図形を探す」という視点で新聞をみると、記事がもつ情報や内容は排除される。これは数学の授業として扱っている以上、新聞に数学的な素材としての価値を見出さなければならぬため限界があることが要因として考えられる。逆に記事に着目して新聞を活用するときには、授業の導入部分で新聞を用いたり、教材の一例(例えば比例単元において、枚数と高さ・重さが比例することを示す教材)として新聞を用いたりするなど、アイデアが必要である。このアイデアについて検討することが今後の課題である。
- ・また上の課題と関連して、次の点を改善していくことも課題である。すなわち、出典を明らかにする点である。今回のレポート作成および説明に関しては、新聞から図形を取り出してくるという作業を行ったが、どんな場面で用いられていたかなど、出典については曖昧なままになってしまった。数学が日常生活に密接に関連していることや、日常の中に数学を見つけることができるということをより印象づけるためにも、新聞のこういった記事や広告から図形を見つけることができたかという点、つまり出典を明らかにすることができれば良かった。これはNIEという視点からのみならず、数学的に考える力を身につける上でも示唆深いものである。

2 社会科の授業実践より

(1) 歴史分野の「第二次世界大戦と日本」の単元では、太平洋戦争中の沖縄戦を題材として取り上げ、様々な資料や新聞記事(全国紙や沖縄の地元紙を含む)の中から沖縄戦の事実を知り、沖縄では現在も6月23日が「慰霊の日」として大切にされていることを学んだ。

(2) 地理分野の「日本の諸地域」では、九州地方の学習で熊本の震災の記事を扱った。自然災害を含む環境問題を知る上で、自分たちが知っている社会的事象の記事を扱うことは、子どもたちが問題を考えていく上で有効であった。

(3) 公民分野の「現代社会の特色と私たち」の単元では、現代社会を読み解くキーワードである「グローバル化」「情報化」「少子高齢化」に関係する新聞記事を班ごとに集め、記事の内容やその記事からわかることをお互いに伝え合う活動を通し、現代社会を読み解くヒントが日々の新聞の中にたくさん含まれていることを感じる事ができた。

(4) 同じく公民分野の「国の政治の仕組み」の単元では、10月におこなわれた衆議院選挙における各党のマニフェストを新聞記事で知ることや、選挙結果（各党の獲得議席数）のグラフを見て、政党を与党と野党に分類すること、連立政権の仕組みについて学ぶことなど、多岐に渡って新聞を活用することができた。

(5) 同じく公民分野の「地方自治と私たち」の単元では、地元の新聞を活用し、地方公共団体のひとつである諏訪市が、どのような地方自治に取り組んでいるのかを調べた。限られた新聞記事ではあったが、市長や市議会が登場し、それぞれの立場での取り組みを扱うことができた、また、市長と市議会が互いに抑制し合う関係にあるなど、地方公共団体の仕組みにも目を向けるきっかけになった。



現代社会の特色をまとめる

IV 研究のまとめ

1 N I E 研究（2年間）を通しての成果

(1) 1年目は主に社会科での研究を進めた。教科会で検討していく中で、社会科で新聞を活用した授業をするなら、公民>地理>歴史という順に、新聞活用はし易いと考えた。公民であれば、現代社会に広がる諸問題を取り扱った記事は新聞の中にいくらかでも転がっている。地理に目を向けてみると、新聞の中には数値やグラフといった客観的データがいくつも存在する。それを自然環境や産業の特色と結びつけるのは難しいことではない。しかし、最も扱いにくいと考えられる歴史分野で研究を進めたことに、研究の価値があったと考える。生徒が社会的事象に対して思考・判断するきっかけとして、新聞が有効に活用できたのではないかと考える。

(2) 上述した社会科の例に引き続き、研究2年目の今年度は国語科や数学科で研究授業をおこなった。「N I E = 社会科」からの脱却を目指し、他教科でどう新聞を活用できるか、各教科会で検討を重ねた。

国語科の授業では新聞の投書を用いた。投書の中に色ペンを使って線を引き、自分自身の意見を支える根拠を明確にできたことは、新聞を有効に活用できたと考える。数学科の授業では、新聞が持つ情報は、記事が持つ内容だけでなく、数学的にとらえることができるきっかけになるようなものもあるということを示した。この実践からも、新聞の新たな可能性を示唆できたように考える。

(3) 授業の中だけではなく、本校では校内のロビーに新聞スペースを確保し、生徒がいつでも新聞を読める環境を整えた。気軽に新聞を読むことができ、家で新聞を購読していない生徒も新聞に触れ合う機会を設けることができている。

2 N I E 研究（2年間）を通しての課題

(1) 新聞活用をすることで、各教科の中で様々な可能性が広がっていくが、新聞ありきの授業になっては本末転倒である。そこで、扱う際には新聞の有用性をよく吟味し、目的や必要性を明確にして扱うことが大切であると考えた。

(2) 記事を扱う際には、同じ社会的事象についても各紙で扱い（立場）が異なる。客観的な事実を把握することに限界があることを踏まえ、生徒の学習にとって何が本当に必要なのか、検討する必要がある。

(3) 研究を重ねていく上で、新聞の良さも感じつつ、新聞を扱うことの難しさもまた感じた。来年度以降も各教科でどう扱えるのか、検討を重ねていきたい。